

## 【報告】

＜生涯学習まちづくり＞

公民館学習ネットワーク活動

習志野市大久保公民館

河野 清一

はじめに

習志野市大久保公民館からスタートした「地区学習圏会議」活動は、平成6年度からは、全公民館（7館）で行われるようになりました。

この活動は、本市の「生涯学習推進構想」を受け、地域単位の学習圏を想定し、いわゆる住民の生活圏での「学習活動の創出」を図ろうとしたものです。具体的には、中学校区をその圏域とし、地域の実情に沿った「生涯学習」を樹立するため、エリアでさまざまに活動する人々を構成メンバーとして、活発な会議活動（コミュニケーション）を通じて「生涯学習の指針」、「課題」、「実践計画」を示していただき、しかも学習推進の主体として実践・活動いただくとするものであります。

公民館では、その方法、過程をまちづくりの「学習ネットワーク活動」として展開いただこうと、支援体制づくりを模索してまいります。

本市のまちづくり

“地域会議”活動の黎明

習志野市は、昭和45年「文教住宅都市憲章」を制定し、それまで混沌としていた行政の課題、しくみを「まちづくり」と規定し、その目標実現の原理を「住民参加による地域会議活動」に求めました。

当時は、本市の将来のまちの姿がどうあったらよいか、様々に議論が起りました。東京の膨張現象（スプロール現象）の中で、このままでは単なる寝ぐらの“ベッドタウン”としてしか、まちは発展できないと懸念され、そういった発展は、まちの

様々な活力を生み出さないばかりか、まちの将来にも不安が残ってしまう。行政にとってもこのような状況から脱出するにはどうしたらよいか、きびしい状況に置かれておりました。

そこで、提案されたのが、まちづくりの原理、将来を明確に標榜した「文教住宅都市憲章」の制定（昭和45年3月）による住民参加のまちづくりでありました。

これは、将来にわたるまちづくりの目標を文教住宅都市と定め、昭和60年を目途とした「長期計画」、さらに3年単位の「実施計画」に裏打ちされたもので、計画の遂行は、“住民参加のまちづくり”であり、各地区ごとのコミュニティープランづくりを年度目標とした住民との「会議活動」でありました。この地域会議活動は、「憲章推進の会」と呼ばれ、行政と住民の共同、協力により成り立たせたものであり、住民側は、地区ごとの憲章理念の推進活動でありました。

これによって行政側の組織対応も、従来の縦割り体制に加え、各専門部局から配された職員で構成する「地域担当制」でありました。

当時としては、未熟ながら、新たな発展への期待もつよく、行政と住民が同じテーブルについて語らう地域会議活動としては、大変活発、快活に展開されました。

中でも地域会議活動発展の契機となったのは、「全総国家プロジェクト」でありましたネオ・トウキョウプラン、東京メガポリス構想を背景とした東京湾の第二次埋立て計画で、これに伴う京葉港臨海工業開発計画でありました。

計画主体の県案（第1次から第4次県案）は、その土地利用計画として重工・製造業（公害発生企業の進出の恐れが予想された）であり、これに対し本市案は、文教住宅都市憲章による「公害防止条例」の制定に基づく、住民福祉を優先とした埋立地の開発計画案（非公害化計画、住宅地の確保、流通業種等の誘致、市内住工混在の解消）を求める提案で、県企業庁（土地利用計画、騒音対策を図る緩衝緑地帯の整備、公共施設計画）、国鉄（現JRは、鉄道ヤードを千葉市側へ）、日本住宅公団（都市整備公団は、勤労者向け住宅建設計画）、

日本道路公団（第1・第2湾岸道路を海側に振る）等、関係諸機関との計画変更の折衝や、今後予定される公共施設計画（学校、幼稚園、福祉センター、公民館・図書館、ほか都市インフラ施設）など、多くの住民への頻繁な広報活動を通じ、また、地域会議での詳細説明などを展開し、全市上げての”まちづくり活動”へ発展させました。

そしてその結果、埋立地からの公害企業進出の排除、市街化区域の過密解消として再開発用地の確保、将来需要が見込まれる公共施設用地の十分な確保、そして都市開発による市の財政基盤を圧迫しない、支障をきたさない公共開発の事業化（公害防止事業団等の設立、事業遂行）維持管理が協定され、湾岸道路緩衝緑地環境の確保や谷津干潟の保全・活用（都市計画事業）など、著しい成果をあげることができました。これも住民参加を前提とした習志野のまちづくりの歴史的な基盤形成になりました。

さて、この事例を通し、本市の住民参加の行政推進の原理・改革についてお話しましたが、これらの行政活動をスムーズに推進してきた「まちづくり会議活動」について、行政職員による「地域担当制度」と住民の「憲章推進活動」によって育てられた「地域会議活動」について、さらに話を進めます。

「地域会議」の目的は、市内9コミュニティごとの地域がつくる「コミュニティプラン」であり、それに基く緩やかな実践活動でありました。

その後、地域会議は、昭和60年を目途に3年ごとの実施計画をローリングする中で進展しましたが、その間、コミュニティプランの推進を図る地域会議システムも、毎月の定例会議（毎月20日の清掃の日で開催）、地区敬老会実行会議、地域予算会議などが設けられ、毎月一回、効率よく行われ、着実に様々な計画が推進され、定着、発展していきました。

その後、各地の地域会議の様子は、毎月2回（1日、15日）発行の広報において「コミュニティニュース」として報告されるようになりました。

習志野の住民参加によるまちづくりのシステ

ムが行政の推進原理として樹立されたものとして評価してよいと思われま

### 地域会議から、あたらしい”まちづくり会議”の再構築

時代は平成に変わり、かつての「地域会議」はあらたに「まちづくり会議」と名称が改められ、現在では、次のような形で会議が設定、運営されています。

新しい「まちづくり会議」は、従来の組織、業務の縦割り方式による行政運営に加え、地域を一四のコミュニティに区分し、単位コミュニティごとに職員の担当制（習志野市地域担当制実施規則）を敷き、毎月一回の定例の「まちづくり会議」として開催されるものになりました。

この会議に加わるのは、町会長が主で、町会を通じて寄せられる地域の様々な要望、苦情、課題を行政事業として、または、予算化するシステムとして機能させようとするものであります。（別図参照）従来の地域予算会議が発展したものと理解されています。

ここに提案される様々な要望、課題は、その場で即断、回答されるが、それ以外は、次回会議までに、調査・検討がなされ、場合によっては担当部局において処理され、あるいは次年度の予算化の手續がされるなど、処理対応、経過について行政担当者から報告されるしくみになっている。

具体的に大久保地区の事例で紹介しましょう。大久保地区（大久保、泉町、本大久保の一部）では、毎月の第一土曜日の午後6時から、商店街の中にある集会所で「会議」が開かれ、二四町会の町会長と市の担当職員（地区長、班長等10名程度）が参集し、地域の防犯、防災からゴミ収集の問題、保健衛生、教育環境の浄化、さらに地域敬老会の開催など行政との連携、コミュニケーションが推進されている。公民館の職員も行政サイドの担当者として、また地域の生涯学習推進機関として会議に加わっている。

ここ最近の話題としては、大久保駅周辺の路上

駐車（自転車も含めて）や、ハミングロード（マラソン、遊歩道の愛称）側溝等の清掃、三角公園の雑草刈り取り、「大久保商店街ふれあい近代化事業」竣工記念行事の実施（7月16～17日 大久保商店街）、大久保地区防災訓練（9月1日 中央公園）、大久保地区市民文化祭の開催（10月29日～11月3日 大久保公民館）など、それぞれに処理方法の確認や役割分担、場合によっては地域へのPR、伝達など、様々に処置されている。

昨年一年間では、10回の会議が開催され、約75件もの要望、課題が処理されている。（主なものは、市の広報に掲載され、市民に知らされている。）

これらの活動については、行政サービスの一環としては、かなりの成果を上げているが、一方では、地域が行政の下請におかれるキライがあり、そろそろ住民のまちづくりの意識（コミュニティプラン）を形成していく方法としての「まちづくり会議」へ発展、改革させるべく、参加するメンバーや会議の運営、課題の学習など、社会教育的な配慮（生涯学習まちづくり）が重要になってきているのではないかと思われる。

そして、大久保まちづくり  
「学習ネットワーク活動」が始まる

「大久保まちづくり学習ネットワーク活動」は、先の住民の行政参加システム（町会・自治会との関係の仕組み）としての「まちづくり会議」とは全く別に、まちづくりの学習を通じて新たな住民主体のまちづくり活動を志向し、公民館での生涯学習推進活動として実践しようとしたものであります。契機は、住民の生涯学習の振興でありました。習志野の社会教育の第3段階への飛躍であります。

第一段階 昭和46年 急激な社会変化に対応する社会教育の樹立。コミュニティ活動の振興

第2段階 昭和56年 生涯教育の統合、学社融合、地域活動の再生

第3段階 平成4年 生涯学習振興による「生

涯学習のまちづくり」の推進。

現在、大久保公民館には、学級・講座から生れたグループをはじめ、それぞれの目的を持った団体、サークル（145団体）が活動していますが、そのほとんどは、自己完結的な学習形態をとっており、地域関係への発展を志向した活動は、あまり得意ではないようでありました。主たる活動としては、自ら学習した成果の発表会の開催、文化祭への参加、チャリティバザーの参加、公民館講座への協力、福祉施設への慰問活動等への参加、その他、奉仕ボランティア活動と称されるものがあります。

これら団体、サークル等に対しては、公民館の業務を、公共施設提供を主たる役割・サービスという範疇で考えていた結果のようで、公民館本来の積極的な支援、サポート、主体的な関わりが十分でなかった理由なのかも知れない。（今後は、サークル・団体連絡会等の自主的な組織化、活動の支援が重要と思われる。公民館活動の展望や課題を語っていく必要が大事である）

そこで、平成四年十月、大久保地域で行なわれている様々な活動をお互いに知り合い、結び合い、よりよく地域に活かせることができることを目標にして活動をスタートさせたのが「大久保、学習ネットワーク活動」であります。

## 大久保まちづくり

### 学習ネットワーク活動要綱

名称 大久保まちづくり

学習ネットワーク

目的 生涯学習のまちづくりを推進する活動

一、学習ネットワーク

大久保地区の文化 スポーツ

ボランティア団体（福祉V0 保健V0 環境V0 etc）活動のネットワーク

二、学級、講座 サークル活動など公民館活動の質の向上をはかる

三、地域内に人材発掘を推進する

- 四、学習した情報を地域に発信する
- 五、イベントなど、新しい地域活動を推進する

**運営** メンバーは、ある程度固定し、ある程度出入り自由とする

運営委員会による運営を推進する

**方法** ひとりひとりを大事に、話し合いから課題を見つけ、様々な学習を通し、目的達成、実践の努力をする。

会議での発言は、一人二分間、全員が発表することを原則とする

司会、記録は、当番制とする。

{実績、メンバー表掲載}

### <会議のながれ>

#### はじめに

主催者挨拶、趣旨（テーマ、課題）の説明  
進め方の説明、自己紹介等（アイスブレイク）

#### 提案説明

情報提供、問題提起

#### 質疑応答

板書表記、記録  
（休憩）

#### 話し合い、討論（書記まとめ）

発表・報告、レポート報告、プレゼン

#### 次回の約束

次回会議の開催、役割、資料作り

#### 閉会

（ある日の進行表から）

会議終了後は、報告書（プレビュー）としてまとめられメンバーにフィードバックされます。

活動（課題）の模索から素朴な問いかけ、できる活動から、はじめよう！

現在のところ、公民館を活動拠点とする社会教育関係団体をはじめ、地域の福祉関係団体、行政関係委員、学校・大学職員、農家・商店主、講座受講生、ボランティアなど様々な立場の方々が加わり、「大久保のまちづくり」をキーワードにそれぞれの視点から、情報を持ち寄り、あるいは収集し、話し合いを通して分析、整理、理解する「学

習会」を展開しています。

当初は、生涯学習のまちづくりとは何か。推進策は、どの様な方法なのか。どんな活動をすれば良いのか。話し合いによる模索を通し、大まかではあるが「活動要綱案」をみんなで創り上げました。

動機付けも、活動のきっかけも十分に意識されない状態で「まちづくり学習活動」を目的に組織化する強引なやり方に多少躊躇（目的と手段の交錯）しながらも、何とかお互いを知合い「集う」きっかけづくりには成功しました。しかしながら、今後の具体的な活動（課題化）、展開、公民館としての対応、支援の方法等については、未だに混沌、整理がついておりません。メンバーの学習課題の獲得、及び活動への認識の共有化を図る段階で、ある課題に対し、話し合いにより、みんなの実践によって解決していく方法、いわゆる社会教育の原理と言うことなのであろうか。

学習活動（課題認識・実践）について

いままでの実践活動からいくつか紹介しましょう。

### <課題…… 地域の情報化について、特に図書館の役割について考える>

この時の学習会は、図書館を活動拠点としている地域の文庫活動のレポートからはじまりました。当然のごとく「情報化時代の図書館行政」へ話が発展しました。早速に行政担当者や専門家等から図書館行政についての実情を聞き、数度にわたる話し合い、学習、討論を行い、現状認識の整理を行ないました。

そして、旧習高跡地に建設される予定の“新しい図書館の構想について考えよう”と話題が発展した。

図書館の生涯学習推進上の役割とそのシステム化（情報化に対応する図書館の位置付けと分館

のネットワーク化をはかる。コンピュータの導入等により、様々な資料メディアに対応できるようにする。)を討論し、さらに、文庫活動の地域に果す意義、役割や読書推進策を展望した。

さらに、貴重な地域の学術情報資源の活用策として、市内の大学図書館の地域への開放などを「提案レポート」としてまとめ上げた。

学習の推進役となったレポーターが、文庫活動や、読み聞かせ活動の実践者であったことなど、具体的事例や行政施策等についてしっかりと分析、把握されており、参加者はかなりの学習の深化が図られたことと思う。

これらの結果(まとめ)については、その後、行政側からの関係機関への働きかけがされ、中でも「大学図書館の開放について」は、先の日大(生産工学部)、東邦大学に加え、千葉工業大学も積極的に地域に開放すべく準備中であるとの回答が寄せられるなど、行政の積極的なフォローで、市の図書カードを提示することで住民の皆さんは、大学の専門書籍の閲覧が出来るようになりました。

図書館のオンラインネットワーク化について、よりスピーディな貸出しサービスを図るシステム構想を研究していく、という図書館からの回答もなされました。

文庫活動については、読み聞かせ活動が主軸であるが、幅広い読書活動として自立できる力を備えるとともに、ここの活動をネットワークできる体制整備が必要とされました。

#### <課題…… 地域での福祉活動の推進について>

##### ——ボランティア活動の推進——

もうひとつ、地域福祉活動を取り上げた学習会では、高齢者福祉施策の中から、特にひとり暮らしの対策として地域で「ふれあい給食サービス」を運営しているボランティアの報告がなされました。

内容は、「給食づくりはうまくいっているのですが、老人宅への配達の手が足りないのではどうか

ならないか」との相談であった。

早速、定例の「大久保まちづくり会議」に提案することになった。突然まちづくり会議の提案者にさせられたボランティアのAさんは、大久保地区の給食サービス活動の現状を説明し、地域に協力をお願いすることとなった。

結果は、各町会が、担当エリアを配達してくれることとなり、ボランティアとしては、各町会へ配送することで問題の解決となった。

「まちづくり会議」での話し合いは、様々でありましたが、新しい協力システムについて町会が受け止めてくれたことは、大変な成果であったし、活動の意義を町会長をはじめ、多くの人々に理解してもらおう契機ともなったと思われる。

一方、地域でのボランティア論議の中から、ボランティアの対象等、介護、援助、協力を必要とする側から、その需要に応じた活動の開発が必要ではないのか、と言う議論が行われた。そこで、身近にできるボランティア活動の入門として、地域の独居老人宅へ電話をかけ、話相手をする「電話ボランティア活動」を各公民館の主催事業として充実するよう要請がなされた。これについては、今年度から全公民館で取り組むこととなり、大久保地区内では、二七人の独居老人に対し、一七名のボランティアが活躍することになり、いまでは、行政との重要なパイプ役となっている。

このほか、古紙、牛乳パック搬送の協力員や公園等のあき缶拾いなど、ちょっと声かけしてくれるボランティア活動の「呼びかけ」等の事業化について、公民館が研究するよう提案されている。

ボランティア活動とは、いま神戸の震災を契機に多くの議論が起きている。国でも法律に基づくボランティア活動団体(NPO)について、その規定が明確になりつつある。

#### <課題…… 地域の高齢化への

##### 対応について考える>

##### ==市民カレッジ構想==

また、来る高齢化社会への対応をテーマとする

学習会では、つぎのような提案がなされた。

本市における「高齢者教育」（学習）の軸は、「寿学級」であります。

これは、六〇歳以上を対象とした学級活動で、昭和四六年以来、市内各地に公民館が設置される毎に開講され、七公民館七学級、三五〇名が毎週水曜日の午後一時三〇分から四時まで、ほぼ一年間を通じての活動を展開し、一般教養の学習を通じて高齢者の親睦、生きがいの増進を図っている。

この間、学習活動も当初の一般教養から、課題学習（健康、福祉、社会参加、世代交流等）、そして社会参加型活動へと活動内容を発展させ、学級そのものも自主運営化が推進されるようになった。いまでは、各学級の学習成果を披露する「寿まつり」や春の合同運動会、秋の文化祭の実施、各種クラブ活動の運営など、また、地域へは、シルバー人材センターへの参加、地区老人クラブの運営、ゲートボール活動、サークル活動の運営など、高齢者の連携や地域とのつながり等が少しずつでもできるようになってきている。

そこで、以上のような現状認識から、近年の高齢化社会の到来や、陸続する高齢者予備軍の増大、高齢者の高学歴化、長寿化を背景に、新しい価値・評価に支えられた高齢者の学習システムの樹立が必要ではないのか、と言うのである。（千葉県老人大学OB会のレポートより）

この課題については、従来の「寿学級」が高齢者の中に広まり、一般化した一方、活動のマンネリ化が進んだとされる。その原因は、年齢が60～90歳代と巾がありすぎ、学習が表面的になりやすく、親睦に走りやすく、それで自己満足してしまう。また、学習を究める卒業評価がないことから、いまでは高齢者の学習欲求に十分に答えきれていないのではないか、という。

また一方、高度な学習欲求のある高齢者の学習チャンスともなっている地球人セミナー等の「成人大学講座」は、課題の集中、系統性がなく一般教養的で内容が深まらない。学習者の社会への還元性にも欠けている。大学講座としての知的探求、評価が十分でない等から、生涯学習時代にふさわ

しい新しい社会教育の構想の視点としては、いままでの「生きがい増進論」だけの延長線上、あるいは範疇ではなく、新たな方向、システムとしては、いわゆる学習成果が社会的に評価され、地域に貢献できる人材育成など、「いわゆるリカレント可能な価値を具えたコミュニテイカレッジ」として、これからの高齢者教育のシステムを構築する必要がある。と言うのであった。（ネットワーキング会議録より）

そして、新しいコミュニテイカレッジの樹立にむけての市民運動を展開しようと、先進市の事例を調査しはじめた老大OBたちですが、その後、県老大OB、寿学級生、老人クラブ、市行政（教育委員会 福祉部）に呼びかけしての公開シンポジウム（11月 2日 大久保市民文化祭）を開催し、高齢者や住民の意見をまとめあげる作業に入った。

その後、平成7年5月 生涯学習時代に対応する成人教育の新しい内容、方法、運営に基づいた「習志野市民カレッジ」が開設された。

#### <市民カレッジの概要>

**学習内容**：習志野学、専攻科目（健康、園芸、パソコン）

**学習方法**：2ヵ年、基本的には従来の方法（講義 演習実習）及び他の学習機会をも加味する。

**運営**：専門家、学習者主体の構成による運営委員会方式、学習内容と方法、運営について指針を提案する

**学 生**：80名／学年

待望の市民カレッジがスタートしたが、課題は山積、これからどう育てていくか、であります。

自主的に「まちづくり講座」に取り組む

二年目になったネットワ～キング活動は、地域課題をもっと身近な話題とするため、メンバーの

学習会をも兼ね、地域で様々な活動する人たちをレポーターとした「まちづくり講座」を自主活動として運営することになった。（別紙）

この活動については、まちづくりにおけるハード面、ソフト面にわたる行政課題としてのまちづくりを理解し、今後の方法としては、課題を絞り込み、専門部会として

- ①地域と教育（子どもと環境）
- ②地域と福祉（高齢化対応）
- ③地域のくらしと産業（大久保の活性化）
- ④ボランティア活動（地域ボランティアとは）

などを学習課題の研究として展開することとなった。

これらの課題については、全体会を通し、あるいは「まちづくりシンポジウム」の開催などによりまとめの作業へ発展させました。

そして、最終的には、学習を通して得た様々な情報や考え、意見を「大久保まちづくりレポート（報告）」（平成5年度、6年度発行）という形に作成し、大久保の持つアイデンティティや新しいコミュニティプランを考える参考とすべく、行政への提案、報告を行ないました。

このほかにネットワーキング活動のイベント事業としてはじめた「人形劇・影絵フェスティバル」の開催、あるいは市内の「若き芸術家の演奏会・展覧会」を推進すべく準備を進めております。

さらに、このような「学習」をどのような形で地域に発信、発展（評価・表現）させていくかが、今後の運営の課題となってきたのであります。

いまのところ、公民館を舞台に先の四つのテーマを柱とした「ネットワーキングフェスティバル」

（3月19日実施、その後、にんじんまつりへ展開）の案が1年間の活動の「まとめ」として浮上してきました。

情報発信の模索、「館報活動」と連携・協力して

大久保公民館の館報発行については、当初、職員の手によって公民館活動の紹介や学級、講座の

案内、サークル活動の募集、行事案内などを中心に編集され、公民館からの「お知らせ版」として発行されていました。

これに対し、PTAや町会の広報委員の方々から、公民館の主催講座として「編集講座」を開催して欲しいとの要望を受けたことにより、参加した受講者に、模擬編集として”公民館報づくり”を指導したことが契機となって生れたのが現在発行している「おおくぼ公民館報」であります。（館報の写真）

いまは、館報編集委員会（10名）の発足により、住民の自主編集によって偶数月の二〇日に発行される定期の刊行物になっている。毎回、一二、〇〇〇部が印刷され、町会を通じて戸別に配付されている。

この活動については、公民館活動のPRを主としているが、地域の話づくりを目的に、編集者のアンテナを積極的に地域に向け、地域で話題になりそうなことや、考えなければならないこと、さらに必要なことを探っています。

そして、今年度からは、まちづくりのネットワーキング活動とタイアップをはかり、ネットワーキング活動の情報発信機能をフォローする紙面を構成するようになった。

近年のインターネット普及に際し、WEBコンテンツによる活動の公開を研究する時期に来ているのではないだろうか。

おわりにかえて

活動を通しての感想

住民が、まちを知り、人と人とのネットワークを築き、地域に情報を発信する。ここに新しい市民像を発見する。これによる活動こそ、まちづくりではないだろうか。この新たなまちづくり活動に対し、確かな期待が込められるようになってきた。

地域の現実を反映した生涯学習の地域づくりを進めるには、住民の行政参加システムや、自治制度の形成を促す行政施策が従来以上に必要であり、住民の参加や自治意識の育成には地域から

の計画化の視点（学習）が重要である。

地域が必要としている諸条件を行政やボランティアの力をあわせ工夫し、人々の協力を得て解決していくことが大切なのではないかと思う。公民館としては、そのための合理的なしくみ、学習支援を模索していきたいと考える。活動はこれからである。

平成六年一〇月二〇日  
大久保公民館在職中、  
全国公民館連合「月刊公民館」に寄稿したものの元原稿

以降その後のつづき。

袖ヶ浦公民館へ異動って

地区学習圏会議事業は、スタートして4年になった。

事業の主旨は、各地区単位で生涯学習を樹立することが目標である。これが、まちづくりに好を奏することを期待しているものである。

住民の生活圏での生き生きとした活動をどう築き、育てるか。それを、その地域の状況の中でどう実現するか、公民館として考える思考フレームであります。

「住民の生き生きとした活動を育てるという現象」を構造的にみれば、

住民が、

どんな目標で

どの様なやり方で

個人としての活動から集団（グループ）としての活動へ

そして、その活動が主体的で

さらに、それが目標実現に沿っているか

そして、このような過程を合理的に推進させることに対し、私たち職員に要求される支援の方法と

は。

これらの関係は、もしかしたら住民にとっては大変余計なことになるかもしれないし、私たちの意図を越えた次元で営まれるものなのかも知れない。

しかしながら、我々は、それを意図的、計画的に遂行しよう（業務として）としているのであります。

この学習圏会議事業については、早く、はっきりとした形で、具体的に何をこうする事業である、と言いたいのであるが、これがなかなか整理出来ないために、私たちにとっては、大変辛い業務になってしまっている。

それを私たちの力量として考えてみると、私たちの関わりがなかなか客体の変容（社会教育）に作用しないがため、事象の分析的思考にばかりにはしり、その解釈のみに留り、総合的な思考（創造的・方法的提案）に発展していかない現実である。しかもそれを内輪の行政組織的な原理（人事異動等、社会教育主事の専門性を無視）で遂行（研修、人事政策）するので、大変に混乱を起こした作業になってしまっているのである。

いずれにしても、誤謬の落とし穴に囲まれ、過ちへの不安にさいなまれながらも、出来るだけ、方法の模索としての議論を築ずいていきたい、思われる。

これらのことは、我々の「使命、ミッション」（仕事）としての自覚を持ち、自らを叱咤激励し、未知の世界にも新たに道ができることを信じ、少しでも前進したい。後につづくよい結果、改革を期待しながら。

袖ヶ浦にも「地区学習圏会議」を設置へ

平成7年6月4日（土）第1回、袖ヶ浦地区学習圏会議開催。参加者36名（別紙）。

参加者については、事前説明を行ない、会議の主旨を伝え、出席の了承を得ていた。事務的な召集後は、会議の主旨、ルール、役割、そして、こ



れからの活動をどう組み立てていくかを話し合い、日程は順調に進みました。閉会を宣言しようとした時、メンバーから「私たちは、なぜこのような会議に召集されたのですか。生涯学習としては、どういうことなのか。事務局（公民館）からの十分な説明が欲しい。」と。しかしながら、

あとは、会議の主旨ばかりのお話するだけで、本当に理解される説明になっていたかは、わからなかった。当然と言えば当然で、参加者自身の生涯学習への理解、インセンティブを求めるばかりで、重要な生涯学習という具体的な行動、モチベーションを上げる計画提起には至らなかった。

ざわめきの中から「メンバーのひとりが、生涯学習について、どういう認識をもっているのか、話は、それからなのではないか」と言う声が聞えた。

住民の素朴な疑問に応え、学習によって問題を解決する。さっそくに協議する課題が見えてきたようで、「このような活動が真に学習圏会議ではないでしょうか。」とその場が繕われしました。

次回の役員会議には、早速に別紙のアンケート調査が実施され、サンプルの分析作業が行なわれた。

結果、袖ヶ浦の住民は、これからの暮らし、特に高齢化の中でのまちづくりの意義については、十分に理解されていることが解りました。

そこで、学習圏会議としては、袖ヶ浦の高齢化状況に対応する中で、住民の澁刺とした暮らし、まちづくりをどう築いていくか。具体的な課題設定が獲得できたようであります。

その後も学習圏会議に係る話（活動内容、運営、他の会議との関係等）が継続したが、平成7年1月17日に発生した神戸大地震を目の当たりにする中で、袖ヶ浦地区の防災計画の見直し、防災（地区の特殊性）についての討論や対応課題、西近隣公園の再計画、整備に対する検討会、また来年が、袖ヶ浦入居30年に至り、その経過の中で、30年間の袖ヶ浦のまちづくり活動を総括する「30年の随想集」の編集活動など、将来に新たな思いをよせる活動に取りかかったのである。

<資料>

- 1、平成6年度 生涯学習活動経過
- 2、平成7年度 袖ヶ浦活動計画  
公園部会 作業報告  
編集部会 作業報告
- 3、会議録
- 4、その他 ” こんにちは 袖ヶ浦” 報

地区学習圏会議とは、何か。どう解釈したら良いのか。今後、何度かこの問いを繰り返すことだろうか。

いまは、この会議に加わったひとたちに、地域における生涯学習の推進を提案する公民館としては、館の事業計画について、いろいろと審議して頂き、” 地域の生涯学習計画” が築けるようにしたい。そういったことがもしかしたら学習圏会議の、機能、役割になるのではないかと、いまは考えている。

「袖ヶ浦入居30年」（仮称）  
随想集編集活動の開始

（別紙、袖ヶ浦30年の随想集）参照

省略

いままでの「学習圏会議活動」について  
平成7年12月19日から毎年  
千葉県公民館連絡協議会企画部会にて  
活動事例として報告、  
千葉県公民館連絡協議会研究大会に事例報  
告

なお、習志野市における生涯学習の推進につ  
いては、各公民館ごとに実施している地区学習  
圏会議活動として報告。

いまのところ、この活動については十分にま  
とめ（理論化）られていないので、独断と偏見  
にてまとめさせていただいた。

（別紙）ザ・公民館 HP参照

<http://www.seaple.ne.jp/~s-kawano>

## 平成11年度 地区学習圏代表者会議

活動の反省と今後の活動について

日 時 平成11年6月30日

会 場 新習志野公民館

### 地区学習圏合同会議の主なコメント記録

昨年度の2月に行いました「地区学習圏合同  
会議」においても提案されておりましたが、地区  
学習圏会議活動も5年から8年を経過し、そろそ  
ろ今までの活動を集約し、今後の展望を築いてい  
く必要があるのではないかと。その中で、私たちの  
「学習圏会議活動」と地域で行われる「まちづく  
り会議活動」（まちづくり会議）、そして「生涯  
学習市民会議」との関係など、きちんとした位置  
づけ、はっきりとした認識を持つべきであろう。

それから、各地区の学習圏会議活動は、すでに  
平成11年度の活動計画が作成され、教育委員会  
に提出されているところですので、各会議設定の  
背景や今後の活動計画について、各代表から発表  
を願います。

### ■ 大久保ネットワーキング

1、活動がどうだったのではなく、活動者の老化  
現象、閉塞感が起きているようです。そう言う意  
味で活力が減退したのではないかと。きちんとした  
目標を再確認し、若返りをはかりたい。

2、さくらまつり、にんじんまつりは、共通の課  
題設定から少しずつ組織の拡大を図り、今のよう  
な形になってきた。結果がどうかかわからないが、  
公民館の関わりが不明確になってきたのではない  
かと。

3、今年の活動の中で、「親子人参クラブ」の活  
動をどう育てるか。「高齢者学習」については、  
とらえる視点に配慮が足りなかった。高齢者介護  
と地域活動の隙間を埋めるものは何か、もう一度  
考えていきたい。

4、引き続き駅前広場の問題や3・4・11号線

の問題を推進していきます。

#### ■ 新習志野地区学習圏会議

- 1、秋津・香澄両地区を学習の対象として学んでいきたい。生涯学習の視点から環境への視野を広げたい。
- 2、テーマは昨年の福祉から今年は音楽（コンサート）そして生涯学習フェスタへ結び付けていきたい。
- 3、問題点としては、運営の課題、PR、地域（町会）との連携について、特に秋津コミュニティとの連携を十分に図りたい。

#### ■ 実花フォーラムちえのわ

- 1、実花は、開拓をキーに挑戦の英知を「ちえのわ」として、5年の活動をしてきました。
- 2、今年は、当初、全体会をひらいて計画を作り、メンバーの役割分担を図りました。  
(内容は別紙)
- 3、活動の課題はある程度明確にしているつもりだが、メンバーの拡大、地域へのPRを今後の重点として検討したい。
- 4、介護保険制度の正しい認識を図るため、福祉施設のボランティア訪問を図りたい。
- 5、戦前の“捕虜収容所”のもたらした文化的影響について研究が進められればと、協議をしている。

#### ■ 袖ヶ浦地区学習圏会議

- 1、問題（課題）が混沌とし、むずかしいと、つくづく感じます。
- 2、「30年の編集」の時は、入居30年というきっかけがあったので、あのような活動（記録集）ができたと思う。
- 3、組織・体制も、課題毎の部制を、いままでの活動経過の中で創り上げました。
- 4、公園づくりについては、  
今までのハード計画から、今後はソフト計画に移行したい。  
地域でどんな活動（行事）が展開できるか研究する。

例えば園芸、植木市、公園管理隊（ボランティア）、野外音楽会、季節イベントの企画。

活動については、何をやっているのかわからないという地域の印象を払拭したい。今後は存在感のある活動を考えていきたい。

公園のコンセプトとしては、「近隣が集える」を改めて確認したい。

- 5、福祉部会については、  
高齢化問題を⇒「介護」に焦点化し、優しさと行動力をモットーとして活動する。
- 6、子ども部会は、従来の育成から子どもの遊びづくりへ

地域の中・高生が協力的になっている。これらの活動を築きたい。

#### ■ 谷津ローズフォーラム

- 1、楽しく自己をたかめることを目標に、部会体制になって3年が経過した。（活動は別紙）
- 2、バス研修など能動的な学習方法を取り入れ、活動の工夫をしている。
- 3、地域を知ることが基本に今年も運営したい。
- 4、課題がいまいちはっきりしないので、今後検討したい。
- 5、谷津干潟の持つ環境保全的な意味合いについて学習課題化することを検討したい。

#### ■ 屋敷学習圏会議「皆友会」

- 1、今までの活動が6中学区の行事と誤解されていたようだ。
- 2、公民館が主催（指導？）していることをはっきりさせたいと思う。
- 3、若い人から老人までが参加できるように。  
スポーツ等固定化した事業→新たな事業へ（16団体が参加）
- 4、この他、バス研修、餅つき大海、カルタ大会を予定している。
- 5、調整池跡の活用について、地元の意見が反映できるように計画を検討したい。

#### ■ 菊田カルテットフォーラム

1、カルテットとは、エリアの4地区を表現しています。

実態として物理的（線路）に遮断され、融合は難しい。学習・調査によってもあきらかだ。文化性の異いについても、今までの学習活動からも明らかである。

2、4年目を迎え、今後は分散の中でそれぞれに活動を企画し、進めた方が良いと思う。

3、教育委員会、公民館、学習圏会議団体の役割がはっきりしていないのでは。

学習圏会議を主体とするなら事務局とは誰なのか、公民館なのか委員会なのか、それともメンバー・役員なのか。それぞれの役割をはっきりさせたい。

4、やはり主体はメンバーであり、少ない役員体制をなんとかしたい。公民館はその支援を。

5、今年の事業は、従来を踏襲しているが試しに藤崎森林公園で音楽会をやってみたいと思う。

組織もこのような意志決定のプロセスではないか。

公民館は、「補助事業」ということで、会議団体と教育委員会のつなぎ、事務進達関係、場合によっては事業活動の事務局もやりますので、各会議においては、公民館職員を上手に使うて欲しい。団体で組織する事務局は、公民館の指導（支援）を受けて欲しい。

5、文化祭への参加の仕方について どのような形で参加しているか？

PRが主です、過去の活動の展示、報告等が主な内容です。

6、講師、指導者の確保について

公民館と相談して下さい。

7、PRについて

活動の低迷を脱出方法として、もっとPRをしてほしい。インターネットに公開することも検討してほしい。HP作成の研修会を実施してほしい。

（合同会議記録から抜粋）

### <協議報告>

先の活動についての発表を前提に質疑し、今後の展望と問題提起、課題提起をお願いします。

1、運営に関わる資金、特に補助金以外の部分はどうしているか。

運営資金は、受益者負担で、或いはバザー等、それが目的ではないが、結果としての資金調達をしている。いずれにしても対応は、工夫次第です。

2、委員と役員の基本的な役割については、

役員は、一応、事業の執行代表ということで、あくまでも学習の主体は委員、メンバーです。

3、会員（メンバー）の働き途は

活動は、与えられるのではなく主体的に関わってほしい。「何かお手伝いがあれば協力します」という姿勢ではなく、主体的に関わろうとする姿勢が重要ではないか。自らの学習活動であることの自覚を持ってほしい。

4、会議の運営の基礎は？

学習圏会議は、企画→役員会→全体会→運営（執行）等の過程で進められているのが普通で、菊田で報告された3者（会議・公民館・教育委員会）の役割とも関連するが、どこの学習圏組

\*\*\*\*\* 追 記 \*\*\*\*\*

ここに菊田公民館が公民館活動25年を記念して発行した記録に投稿したレポートがあります。参考に掲載しておきます。

：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：

習志野市の公民館活動は、昭和46年、菊田公民館を設置してからである。25年が経過しました。

（公民館の歴史）

### 次官通牒から社会教育法制定、法改正

公民館施設の設置は、昭和21年、戦後の荒廃した郷土の復興や、祖国再建を明日への希望と住民の豊かなコミュニケーション、様々な活動、そして新たな地域連帯等、それらを教育の原理によって果たそうとした寺中作雄文部次官が、「公民館の設置運営について」において提案し、「公民館活動をはぐくむ施設運営が新たな文化創造、福祉増進に発展する」と述べました。

その後、昭和24年、「社会教育法」が制定され、公民館は、地方公共団体の設置責任と運営が法的に制定されました。公民館は、先の法20条の目的、22条の事業設定・展開に基づき、地域の教育・福祉の増進に寄与する運営がなされる行政設置の「教育機関」とされました。

### 昭和46年答申 急激な社会変化に対応する社会教育の在り方

習志野市は、昭和46年、国の高度経済成長下、首都圏人口のスプロール化の中で、教育行政の樹立政策として、「習志野の教育」の原点とされる菊田校（菊田小の前身?）、菊田集会所の地に文教住宅都市を標榜する本格的な社会教育施設として、菊田公民館をはじめ設置しました。

新しい住民が増え、住民関係が希薄化する中、住民の学習活動を大切に、生き甲斐や教養向上を目指した公民館活動が展開される一方、住民の文化活動を中心に様々なサークル活動が一気に芽を吹きました。翌々年の昭和48年には、本市東地域の文化拠点の形成を図るため、従来の市民会館を大久保公民館として用途変更をしました。

その後、「習志野の社会教育」は、中学校区ごとの公民館設置計画（市長期計画）を企て、昭和52年、屋敷公民館（清掃工場設置・移転、浸水対策、集会所設置）、54年、実花公民館（学校施設の地域開放）を設置しました。

### 昭和56年答申 生涯教育について

このころから新たな教育政策として「生涯教育」がいわれだし、習志野市は急増する児童生徒への対応策として、義務教育施設不足解消を第一義に、市総予算の3割以上を投入し、教育環境整備に全力を果たしました。この間、「生涯教育」は、「家庭教育、学校教育、社会教育を統合する」教育行政推進の基本的な考え方になっていきました。

昭和45年の「文教住宅都市憲章」制定以来、行政の「まちづくり化」により推進された「地域会議」や「地域担当制」に裏打ちされた「コミュニティプラン」が徐々に具現化し、その結果、

まち”には新たな課題が生れてまいりました。特に、都市基盤整備において、ほぼ100パーセントの達成率を誇る袖ヶ浦地区では、住民の新しい価値の指向（子どもの健全育成、地区コミュニケーション、文化性、まちづくりなど）の要求が高まり、その住民の活動拠点として公民館の設置が強く要望されました。具体的な設置場所がない事情にもかかわらず昭和56年、地域住民との協議のなかで袖西近隣公園内に袖ヶ浦公民館（地域図書活動、地域活動の拠点）を設置することができました。また翌年には、谷津ソフトタウンの中に谷津公民館（谷津遊園閉園に伴う高層住宅化、商店街活性化、干潟の保存）を設置しました。

公民館の「事業」も従来の学級・講座に加えて、地区活動を振興するイベントや集会活動、町会・団体活動が俄然活発化し、公民館は、様々なコミュニティ活動の拠点へと様相を変えていきました。

一方、地区活動が活発になってきた東部の東習志野地区においては、その活動の拠点として東習志野コミュニティセンターが設置されました。コミュニティセンターは、施設提供サービス等を主目的とし、しばらくの間、公民館専任職員を置き、運営体制の樹立が図られました。その後、教育サービス部門を除き、施設管理・提供を主に地域団体の管理としました。

### 平成4年答申 生涯学習振興法

時代は平成に変わり、「教育」は受験競争等の過熱化等で形骸化が余儀なくされ、社会発展の疎外要因になる恐れが目立ち始めたことから「教育の改革」（臨時教育審議会 1987年）が言われるようになり、新しい教育の改革コンセプトとして「生涯学習」が文部省によって推進されるようになりました。

本市も早速ながら、教育行政の「生涯学習化」への移行をはかるべく、平成元年、千葉工業大学教授 石川 隆三郎氏等を中心に提案された「生涯学習のまちづくり」の建議を受け、「生涯学習推進市民会議」の設置、「生涯学習推進本部」を行政の執行部長の参加を得て設置し、生涯学習推

進計画（生涯学習のまちづくり）の推進態勢を確立いたしました。

平成4年、こうしたなか、第2次埋め立て地に新習志野公民館（埋立地公共施設整備策）を設置し、秋津地区が生涯学習推進のモデル地区に指定されたのを契機に、地域と学校が一体となった“生涯学習のつどい”を開催し、「学社融合」を主とする生涯学習社会における教育の方向性を示すことができました。

現代的な課題となってきた「生涯学習の推進」（生涯学習のまちづくり）については、大久保公民館で推進されるネットワーク活動为契机に、各公民館を拠点に「生涯学習地区会議」（学習圏会議）を設置し、地区独自の生涯学習の推進（まちづくり）を図るようになりました。

平成8年度、袖ヶ浦公民館では、まちづくりを模索する中、入居30年を記念した記録集の編集活動が展開され、住民の明日への希望を育みました。

大久保公民館は、商店街やハミングロード（マラソン道路）についての学習をとおり、大久保のまちづくりの中に“さくらまつり”を計画し、多くの市民がふれあいました。

菊田公民館は、津田沼、鷺沼、藤崎の歴史マップづくりを通しまちづくりの学習。

実花公民館は、先陣の開拓の知恵を学び、学習を通しての地域開拓を。ロシア人捕虜収容所、ドイツ人捕虜収容所の解題。

屋敷公民館は、新旧住民のふれあいをスポーツ行事の開催によって。

谷津公民館、新習志野公民館は、まちのアイデンティティを模索する学習、会議、イベントを実施しています。

一方、習志野の公民館活動の25年を記念し菊田公民館で開館25周年の集会在催され、地域社会の生涯学習化への移行と、逼迫する財政状況を打開する行政改革推進策の中で、住民と共に4半世紀の歴史を築き、公民館の活動の成果を確認し合い、今後の新たな展望、発展と、そしてまちづくりへの展開・発展に期待をつなぎました。

日本国憲法が制定され、平和な地域社会の実現をめざした地方自治法、教育基本法が制定・施行されてから50年が過ぎました。

習志野市は、昭和45年「文教住宅都市憲章」を制定し、まちづくりの理念と原理を宣言し、以来、着実に「住民参加のまちづくり」の具現化を図ってまいりました。

まちづくりへの主体的な市民の活動の支援を使命とした公民館は、21世紀を迎え、地方自治体が疲弊している状況下、これからの新しい時代に対応する公民館の役割とは何か、そしてこの新しい公民館像をどう描くか、大変な時代の岐路におかれております。いま将来展望について語る重要な時期にあります。

平成11年5月

実花公民館長 河野 清一

“ ” “ ” “ ” “ ” “ ” “ ” “ ” “ ” “ ”

以上、習志野の公民館活動を30年の歴史発展として総括してみました。

「習志野の社会教育」を語るには十分な情報を擁しております。住民の学習活動へのきっかけづくりです。いまは、せっかく築いた手法が、停滞していること、大変に残念に思います。

21世紀は、まちづくりへの市民参加から市民協働への社会システムに発展させるべきでしょう。

十分な時代認識、社会認識を踏まえ、時代に対峙、対応する新しい公民館活動を築いていきたいと思います。

新しい創造を築く、学習活動を！